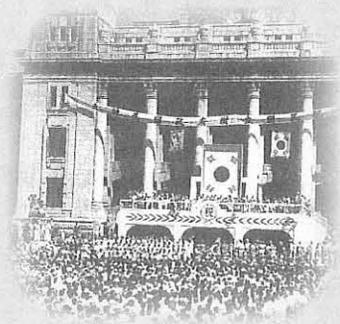


い。それこそ関心の一つであることはもちろんである。しかしその表層だけではなく、深層に、そして真相に迫っていきたい。それが私の関心事であり、私のメッセージの発信したいところである。それが共感できるという意味では、時宜に便乗する形になっているかもしれない。

確かに慰安所と軍が密接な関係にあったのは事実だが、それだけで「軍が慰安所を管理、統制していた」と判断することはできない。この本を読み終えてから、『日本軍慰安所管理人の日記』という本の題名から「日本軍」を取り外したくなったのはなぜであろう。

## 第六章 朝鮮戦争と韓国社会の変化



一九四五年、韓国は日本の植民地から解放された。戦争直後、私の故郷の村にも徴用・徴兵された人たちが帰国した。私の家では、広島の炭鉱地から帰ってきた従兄の歓迎の宴会が開かれていた。隣家には南洋群島から引き揚げてきた青年がいた。彼はB29機の空襲の話など戦争の話を印象的に語ってくれた。彼らは戦争責任とか賠償などの話はまったくしておらず、ただ無事に生き残って帰ってきただけで運が良かったと思っただようであった。

村人は日本の植民地からの解放感をそれほど感じなかったようである。ただ無料で配給されたアメリカ産の砂糖やドロップに書かれた横文字のラベルに、多少異文化を感じることはできた。しかし米軍政の政治力はそれほど農村まで影響しなかったようである。国家的な激変にも関わらず、末端の農村は以前のように伝統社会であった。

家や村の言語生活には戦前と同様、ホンタテ、バケツ、ナワトビ、ジャンケンポン、オクサン、マンマなど日本語の言葉が多く使われた。女の子の名前に「子」を付けることはもちろん、日本式で呼ぶこともあった。例えば「明子」を韓国語では「ミョンジャ」と読むが、日本式で「アキコ」と呼んだりした。

私は終戦の翌年、国民学校（小学校）に入学した。そこはほとんど日本植民地時代のままであった。学校の教科書も日本語の直訳のものが多かった。秋の運動会も、紅白に分かれ騎馬戦などをする時は「アカガンバレ、シロガンバレ」と日本語で応援していた。卒業式で卒業証書をもらう様式も、「蛍の光」を歌いながら泣くという日本時代のままであった。つまり、終戦直後の教育は、戦前の様式を韓国人が入れ替わって継続して行うような状況であった。そこに反日感情は成立していなかったのである。

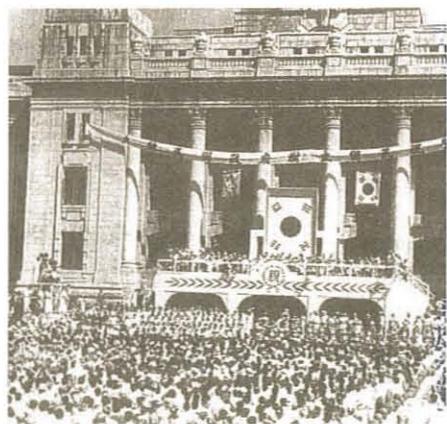
では植民地から解放された韓国はどう変わったのだろうか。韓国社会の重要な変化要素として、朝鮮戦争、農地改革、西洋思想の浸透、教育、マスメディアなどがあり、特に朝鮮戦争によって異文化と接したことにより、人口移動、社会や経済生

活の重要性を知り、特に農村の青年が軍隊生活を通して伝統文化を見直したという点などで、韓国社会は大きく変化した。

一九四八年八月十五日、李承晩が日本植民地朝鮮総督府庁舎であった中央庁において、米軍政時代を終え、独立国家の「大韓民国」を宣言した。彼は国を救った民族的英雄というカリスマをもって、初代大統領に就任した。

独立は韓国の体制に大きな変化をもたらしたが、その要因として以下が挙げられる。自由民主主義を掲げる米軍政の実施、統制経済の崩壊による社会の混乱、旧日本人所有土地の新韓公社による管理、左右翼の闘争、一部農村におけるゲリラ活動、義務教育の実施、農地改革、朝鮮戦争などが社会変化の顕著な出来事であった。

第二次世界大戦の終戦によって三十八度線で南北が分断されたが、村では韓国と北朝鮮の緊張関係は感じなかった。私の生まれ故郷は中部地域の三十八度線から南に近いところであり、朝鮮戦争以前までは村人は例えば冠婚葬祭など必要であれば三十八度線を越えて往来することができた。父も、北朝鮮と韓国を往来しながら商売をしていた。夜の暗闇を利用して三十八度線を越えて避難して来た人もいた。



1948年8月15日の大韓民国政府樹立国民祝賀式

ある日、私の親戚の大家族が三十八度線以北の全谷というところから避難してきて、しばらく私の家に泊まった後に、隣の家に住むことになった。このように三十八度線によって分断された一部の家族や避難民は、戦争中にそれを越えて結合した。その一方で、思想による民族移動が行われた。例えば共産主義が好きな人は北へ、自由民主主義が好きな人は南へというようにである。

要するに終戦直後において、三十八度線は異国との国境という意識ではなく、臨時の分離線のように思われたのである。したがって、反共意識もほぼなかった。ただ朝鮮戦争によってできた休戦ラインは、南北の極端な対置に及ぶことになった。

一九五〇年六月二十五日、リッチウエイ將軍が「夜明けとともに種々の攻撃地域への激しい砲撃をともなうて始まった」と記述しているような形で、朝鮮戦争が始まった。人民軍は主に戦車と鉄砲を持って侵入した。大砲の玉が北から爆音を響かせながら私の家の屋根の上空を飛んだ。そして、多くの犠牲を出しながら、一九五三年七月二十七日に三年間の戦争は休戦となった。

多くの国連軍は平和のために命を捧げたが、一部の兵士たちは悪魔のような者であった。平和を作り守るために戦う軍隊であっても、死の前にモラルを持つとは限らない。否、戦場でモラルを求めることは無理である。戦場で軍人が矛盾した行動をとることにについては、むしろ戦争そのものが問題と考えたほうが正しい。兵士によつては、恐怖を感じる以外にも、武器を持って無制限な自由と極端な満足を求めようとすることもあり得る。

戦争の状況を思い出すと、我々が普段いかに抑制されているかと考えてしまう。戦場は爆弾だけが爆発するわけではない。セックスの爆発も伴う。戦争には殺人だけがあるのではなく、娯楽と浪費も氾濫する。それは贅沢の極致のような現象でもある。国連軍も悪いことを多く行ったのは戦争の時である。米軍は村のシンボルになっている松の木を切ったり、墓の石碑を標的にして射撃練習をしたりした。

最悪なのは、村の女性が性暴行されることである。私は国連軍が来るのを見張ったこともあった。性の暴行、性の商品化、喧嘩、殺人などは人間社会以前のもののようにあり、あるいは社会の一角の闇社会が顕現されるようなものでもある。戦争では軍隊の恥をさらすだけでなく、社会もそうであることをさらすようである。その戦争の矛盾を本質的に問うべきである。

私の故郷の村人が女性の貞操を守るために売春婦を歓迎し、結局、村は売春村となったことは、何度も触れたように戦争が村の倫理道徳を変えた例である。もともと倫理道徳的には商業に否定的であり、特に女性の商売は軽視されていたが、基地村の付近を巡りながら片言の英語を使い、物売る村の女性も出てきた。

しかし、村には米軍部隊は長く駐屯せず、少し離れた東豆川に移った。無名の町だった東豆川は、動乱の時に激戦場であったが、米軍の駐屯により基地村として全国的に有名になった。

休戦によって朝鮮半島は南北に分断され、厳しい敵対関係となった。大きく言う、米国とソ連との冷戦時代の東西対立を象徴するようになった。冷戦というのは、武器を持って直接的に戦争する代わりに、経済や政治などにおいて敵対関係にある状態をさす。

三年間の朝鮮戦争は、朝鮮社会に大きな物的、人的被害を与えた。北朝鮮は人口の二八・四%の二七二万人を死者や難民によって失い、韓国は一三三万人を主として死者として失った。中国は死者行方不明者合わせて百万人、米国は死者行方不明者合わせて六万三千人程度の犠牲者を出したのである。同時に傷痍軍人、南北の離散家族、孤児、混血児などの問題が起きた。傷痍軍人は乞食のように村を廻りながら、戦争で国のために負傷したことを理由に暴れたりして、民衆にとっては恐ろしい存在だった。



板門店

南北の分断により、「二千万人離散家族」は悲劇の象徴となり、民族統一を組み合わせた悲願の言葉が流行るようになった。そもそも朝鮮戦争は「南北統一のための戦争」であったが、結果としては皮肉なことに、南北が世界でもっとも緊張の強い同民族間の関係になってしまったのである。朝鮮戦争によって作られた休戦ラインは三十八度線より緊張感を持つ悲劇の線になった。韓国側では一五五マイルの全休戦ラインを塹と地雷などにより武装化し、緊張感極まりない。

その南北の対置と緊張の接点が南北の唯一の窓口である板門店である。今は板門店観光が戦争産業として定着しているが、南北分断は民族の悲劇であり、離散家族にとってはより悲劇である。報

道によると、休戦ライン近くにきて北に向かって祭祀を行う人が多いという。現代版の望夫石のようである。

韓国民にとっては、北朝鮮への恨みと脅威は常にある。

故郷の村の青年たちが越北した家は、彼らがスパイとして訪ねてくるかもしれないという恐怖におびえることになった。戦争中行方不明になったある若い女性は、北朝鮮で生きているのではないかとも言われていた。その一方で、普段は往来できなかった家族が、戦争のどさくさに紛れて結合した例も多い。

しかし離散家族は、別れたこと自体だけでなく再会することも悲劇となり得る。なぜなら、別れた後に別の人と再婚していたり、家族構成や考え方の変化によって再結合が難しくなったりするケースがあるからである。

朝鮮戦争は、当事者国である韓国をどのように変えたのだろうか。もちろん戦争により公的な殺人行為が行われ、人命や財産など大きな被害を蒙った。他方、平和や愛国に対する国民感情が高まった。戦死者や伝染病死者、住民の移動による人口

構成の変化、またそれに生物学的、生態学的に適応して生き残る価値観が生成され、武器や馬などによる文化変容が起こり、組織や物資などが社会の結束化、階層化、解体化などに影響を与え、敵を憎むことにより自民族中心主義が強くなり、統合性などにより軍部が政権を握ったり、国家意識が創出されたりする。これらの影響はもちろん肯定的否定的の両面があるが、学者によっては肯定的な点に傾く傾向もある。また軍隊の組織が社会の階層化に影響するともいわれる。

従来朝鮮戦争に関する書物は、主にその起源や原因に集中してきた。戦争は悪いが、社会を変化させた。朝鮮戦争が韓国の社会を根本的に変革させたのも事実であり、韓国社会の変化において朝鮮戦争は重要な意味がある。最近では東アジアにおける冷戦時代の経済や政治状況などへ及ぼした影響の政治的、軍事的な研究も増えている。朝鮮戦争も多角的に検討すべきである。

アメリカの人類学会では戦争が重要なテーマになっており、年に一度の大会やセミナーを開き、その結果を出版してきた。主に小規模社会における紛争は、社会の富の蓄積、鬱憤を払う攻撃性、領土拡張など、さまざまな状況や目的によって起き

る。つまり人類学で主に扱っている未開戦は文明戦と異なったものである。

戦争人類学的に見ると、南北は同様の民族と文化、社会であり、朝鮮戦争は同一民族の中で自発的に起こった紛争や動乱ではなく、第二次世界大戦の処理過程で残された南北分断の悲劇から生じた「統一戦争」であったといえる。

アメリカは経済的に得ることもないが、国連の機構を通して安全保障の道が開かれたことで朝鮮戦争の参戦に国民の支持を得た。日本は朝鮮戦争の特需景気によって戦後の経済苦境から脱することができた。結果的に、「隣人の苦しみ」から利益を得たことになる。

### 反共思想と軍事クーデター

第二次大戦によって日本が敗戦した結果生じた三十八度線、それを北朝鮮が無く

して統一しようとした朝鮮戦争の結果、むしろ厳格な分界の線、現在の休戦ラインになったというのは上述した通りである。朝鮮戦争前の三十八度線はわりと曖昧な線だったが、戦後の休戦ラインは超えると危険な死線のような線になった。分界線をなくそうとした朝鮮戦争により、以前より厳しい線になったことは皮肉なことである。

朝鮮戦争の結果、韓国国民は外敵による戦争に巻き込まれて悲劇が起こったことで民族意識が強くなったのかもしれない。特に共産主義への反感である「反共」意識を強く持つようになった。

第二次大戦後植民地から解放された韓国は、「反日思想」と南北分断からの「反共思想」を二本の柱としたが、朝鮮戦争以前には国民には反日感情はあっても、政治家が訴える反共という言葉は実感がなく、国民への説得力は弱かった。しかし、朝鮮戦争後は反共思想が一般化するようになった。政府は政権維持のため、北朝鮮の挑発を機に愛国心による総和団結を呼びかけ、学校では反共教育が徹底された。

私は一九五三年に中学校に入学した。校舎は戦争で破壊されたので隣の小学校の

校舎を借りてしばらく授業が行われたが、授業以外に破壊された建物の撤去に動員されたりした。その後すぐ本校に仮建物を建てて移り、授業が行われるようになった。黒板の両側には「反共」「反日」と赤で書かれた札が掛かっていた。学校では、ほぼ毎日「六・二五の歌」「統一の歌」を合唱したものである。前者は最後まで仇を刺し殺すという内容であり、後者は輝く国旗の下に統一しようとする希望の内容である。私は歌詞の一部を今も憶えている。

### 《六・二五の歌》（※拙訳）

ああ忘れられない、どうして私たちのこの日を

祖国を敵が踏みつけてきた日を

素手の拳で 赤い血で 敵を撃退して、

足で土地を強く踏み、激怒した日を

(リフレイン) いまや復讐しよう、その日の敵を

追われる敵の群れを追い払い

敵の一人まで打ち倒して  
今に輝く国のわが民族

### 《統一の歌》（※拙訳）

私達の願いは統一

夢にまで願うのは統一

この真心を尽くして統一

統一を果たそう

この同胞を生き返らせる統一

この国が探し求めている統一

統一よ、早く来い

統一よ、来い

政府は「反共」「反日」をもって国民の統合性を高めようとした。「韓国人は団結

心が弱い」と反省する言葉が流行した。「一本の弓の矢はよく折れるが複数になるほど折れ難い」という日本の昔話が小学校の教科書に載った。李承晩政権は「団結すると生きる。分裂すると死ぬ」というキャッチフレーズで、国民に団結を呼びかけた。

李承晩大統領は北朝鮮の脅威から国を守るため、反共連合組織を作ろうとした。反共はすなわち親米を意味するようになった。朝鮮戦争後、反共は国家レベルのイデオロギーとして定着し、そして強い反共思想は軍事情権を生んだのである。

学生デモにより李承晩大統領が降り、社会が混乱して北朝鮮が再び侵入するのではないかと憂慮され、民衆が不安になった。朴正熙はその機会を利用して、一九六一年五月十六日、軍事クーデターを起こした。大統領になった朴正熙は、北朝鮮への国民の脅威を政治的に利用して政権の安定を計った。民族の統一という言葉タブーとして、政治的国家主義によって反共思想を徹底化した。彼は反日より反共を強調しながら軍事独裁政権を続け、軍事情権に反抗する民衆に対して北朝鮮の脅威をもって統合性を主張し、独裁化を強化した。

アメリカの要請と朴正熙政権の対米協力政策によって、一九六五年二月から七三年まで約四十万人の韓国兵がベトナムに派遣され、そして四四〇〇〇人が戦死した。戦後多くの新生国家において行われたように、韓国の軍隊組織が社会の近代化へ影響したのも事実である。韓国政府は、朝鮮戦争で国連軍が守ってくれたことへの恩返しとして、韓国軍の強さを国際的に誇示するように宣伝した。しかし「アメリカは実弾を提供し、日本は物を売り、韓国は血を売った」という言葉が流行り、アメリカに人間の生命を売るということで、反戦的世論もあった。そんな中で、ベトナム戦争へ行き、無事に戻れたら豊かに暮らせるという夢を持たせるような宣伝が続いた。

その流れで、姜在求という英雄が作り出された。姜氏は、一九六五年十月に所属の猛虎部隊の中隊長として派越の準備訓練中、ある部下が誤って落とした手榴弾を瞬間的に自分の体で庇って、部下百人ほどの生命を救って犠牲になって死んだという。当時の朴正熙政権は、これを愛国軍人のモデルとし、記念碑を建てて宣伝し、教科書にも載せた。これを機に学校でも軍事教育が行われるようになり、郷土予備

軍が創設されるなど、国家の軍事的色彩が強まったのもこの頃である。

ベトナム戦争中の韓国軍の残虐行為については、国際世論やジャーナリズムで色々と問題にされていた。朝鮮戦争の悲惨さを体験した私は、戦争がベトナムで起こっていても、いつかまた韓国で起きるのではないかという恐怖感を待った。

### 性的拷問と民主化運動

国連軍による性暴行がきっかけとなり、私の故郷の村が「基地村」売春村」となったのは、第一章で触れた通りである。しかし韓国国内では、国連軍の軍人たち、とくに米兵がそういう残酷な性暴力を働いたということを、国民にまったく知らせていない。韓国政府は、自ら国民に対して犯した罪を正直に表明して責任をとると同時に、アメリカや国連に対して声を大にして抗議すべきである。

戦争期における国連軍や韓国軍が行った自国民女性への性暴行は「米軍慰安婦」のきっかけとなったが、それとは別に「韓国の民主化運動」のきっかけとなった女性に対する人権侵害事件を挙げる。一九八六年に全斗煥独裁政権で起こった、警察による「権仁淑さん性拷問事件」である。

当時ソウル大学の学生（衣類織物学科四年生、除籍）だった権さんは、学生の身分でありながら、人権運動をする目的で富川市にある会社に就職するために、他人の住民登録証を偽造した罪で、一九八六年六月四日夜九時ごろ、富川警察署に連行された。その際、同僚の隠れ場所を白状するよう翌日三時まで尋問されたが、警察側はその尋問結果に満足せず、同事件を担当した富川警察署の文刑事事が、六月六日と七日の二度にわたって手錠を掛けたまま性的拷問のために強姦したという。

権さんは、面会に行った父母を通してこの事実をマスコミに知らせ、文刑事事を告発した。しかし警察当局は、「文刑事事が調査に熱心なあまり偶発的に彼女の胸を軽く触っただけである」と釈明した。

これに対して、宗教団体をはじめとする「女性団体連合性拷問対策委員会」が設

けられ、「生命の象徴である人間の性を拷問の手段として悪用して人間の尊厳性を侵害した」と史上最大規模の弁護団を結成。七人の弁護団により「刑事事が、密閉された調査室の中で後ろ手錠を掛けたまま、一時間半くらい電気を消した状況で調査した」という理由で検察に告発した。

これが大きな社会問題となり、同じく治安本部により水拷問をされ亡くなった朴鍾哲君の事件とともに、八六年、八七年の民主化運動の大きな力となった。

### 韓国におけるキリスト教の流行

植民地解放後の韓国社会は、まだ儒教とシャーマニズムを中心とする伝統的な価値観を持っていた。多くの村人たちはキリスト教には関心がなく、牧師や宣教師が村に入ると嫌な表情をした。

しかし朝鮮戦争は、韓国人の精神面、文化面に大きな衝撃を与え、伝統的価値観にも変化をもたらした。北朝鮮に共産主義政権が樹立されると、信仰の自由を圧迫された多くのキリスト教信者が北朝鮮から韓国へ避難してきたのだ。これによって教会が急成長した。その代表的な例はソウルの永樂教会である。この教会は、共産主義者たちの弾圧に耐えられずに避難した故郷を失った民の共同体のようなものであった。同じ民族、同じ言語で敵、味方がわからず犠牲になる人も多くいたなか、十字架をつくり米軍の庇護を受けることが出来た。つまり反共主義が韓国にキリスト教を普及させたのである。

戦争の傷痕から回復する過程において、アメリカの援助に依存し、アメリカの文化が圧倒的に普及するようになり、救護物質が孤児園と教会に配給されたりした。米軍政はクリスマススを公休日指定し、キリスト教文化が流行した。

李承晩大統領は植民地時代の政策をそのまま踏襲したわけではないが、迷信打破政策は日本の植民地政策と変わりなく一貫して続き、巫俗は迷信とされた。儒教にも否定的ではあったが、排斥をするような積極的な政策は取られなかった。

伝統的な価値観を守ってきたわが村周辺でも、キリスト教流行の動きが起こった。朝鮮戦争の終戦直後、面事務所がある隣村に萱葺きの民家を借りてキリスト教会が建った。私の門中の本家である宗家の三男がクリスチャンになり、執事になった。彼は真面目な信仰者になり、牧師の推薦でソウルのピアソン宣教学校に入学することになった。

彼は子供の時から斜視であり精神病の持ち主だったから、その家では最初はクリスチャンになっても構わないと放っておいた。しかし、彼が名節に家に帰っても、祖先祭祀に参加しなかったことを問題にした。彼が精神病で発作を起こすと、キリスト教を信じているせいだと思つた家族はシャーマン儀礼を行った。

そんな家族の中にあつても、彼の信仰はくずれなかった。一九六〇年、当時大病を患っていた私は、彼の案内でその教会へ行くようになり、そこで学習を受けて、その年のクリスマスに母教会である永楽教会で洗礼を受けた。

朴正熙軍事独裁政権の時期には、キリスト教会が反独裁運動の重要な拠点となつ

た。代表的なものとしては、金大中を支援し共闘した天主教正義具現司祭団などが挙げられる。民主化闘争を担つたクリスチャンの金大中や金泳三らは、クリスチャンの同志たちに現実の政治闘争への参加を呼びかけた。

キリスト教は動乱後の社会的、政治的不安と貧困の中で分裂し、新しくキリスト教系新興宗教が出現した。統一教会は「反共」を教理とし、既成の教会を批判して宗教活動を展開、教勢を拡張した。しかし統一教会は、戦前の神秘主義を基に特殊な原理を作つたため、異端と言われるようになった。

統一教会だけではなく一般的にキリスト教は、朝鮮戦争の中で共産主義により弾圧を受けたために反共的になった。当時の教会の言論でも朝鮮戦争を「反キリスト教に対抗する戦争」と決め、青年たちに参戦を勧めたりした。

また韓国プロテスタントの感性的神秘主義運動は、一般的に敵対視され忌避する傾向があるシャーマニズムを神秘主義に引き込み、巫俗的神秘主義と韓国の風土が合致して教会の急成長をもたらした。神霊的神秘主義を端的に表現する言葉として「通声祈祷」「聖霊臨在」「放言」「三拍子祝福」「治病」「按手治療」「血分け」「接神」「降

神劇」などがあるが、このような新興聖霊運動は韓国国内だけでなく韓国人が住む世界随所に現れている。

韓国のキリスト教会にはシャーマニズムとキリスト教が共存あるいは混在するようになり、多くのクリスチャンはシャーマニズムを迷信だと思いつながら、その中にシャーマニズムが埋没されている事に気がつかなかった。プロテスタントが成長した秘訣は、巫俗を受け入れた宗教的熱狂主義に根元を置く心靈復興会にあると思われる。

キリスト教はシャーマニズムを迷信とし、それを改宗させようとした。農村部では低迷したシャーマニズムが都市を中心に盛んになり、キリスト教会の中にシャーマニズムが混合して存在するようになった。そして信仰として女性層に深く浸透した。

一九五〇年代の韓国教会の平均信徒の増加率は十六・五%であった。

## 韓国の近代化と「セマウル運動」

朝鮮戦争を通して、韓国人は自国が弱小国家であることを痛感させられた。そして伝統社会や国家に対して批判的になった。特に第二次大戦後の韓国社会がまだ男性原理の強い父系社会の儒教社会であること、男尊女卑思想が一般的であり、血縁主義が強く、両班という身分社会であることに批判的になった。強大国の間で作られた南北分断と朝鮮戦争の悲劇は、韓国人の心に大きな被害をもたらしたのである。

しかし戦争が残したのは被害だけではなかった。強くなるためには反省しなければならぬということも意識し始めた。それは時には自虐的でさえあった。このような家族主義、権威主義、集団主義から西洋の価値観への転換に大きな役割を果たしたのは、解放後の米軍政当時の文化政策、特に六・二五動乱後の米軍文化であった。今日、韓国人の多数が想像しているアメリカ文化というのは、米軍文化と言っても過言ではない。

アメリカ文化が韓国社会に及ぼした影響はきわめて大きい。アメリカ文化の価値特性のうち、①普遍主義と②実用主義および③個人主義は、何よりも韓国社会の近代化に大きく寄与した。

戦争は南北における人口の構成の比率を変化させたが、さらに避難民による民族移動も起きた。農民にも移動性がみられ、伝統産業の農業を軽んじて、子供の教育のために都会へ集中する現象、つまり離農現象が起きた。その結果、都市と農村の貧富の差が激しくなったのである。貧しくなった農村からはますます流出し、そのため都市周辺にスラム街が形成された。また、田舎の女子は上京して売春街に売られたり、女中になったりするのが一般的であった。

朴正熙大統領は、一九七〇年に「セマウル運動」を立ち上げた。セマウル運動とは、「自立」「勤勉」「共同」のスローガンの下、政府によって進められた農村振興運動である。貧困に悩み人材の流出が止まらない農村の近代化を進めるという目的で始められ、道路の改修、屋根の改良、倉庫の建設などが農家の共同作業で行われ、目覚ましい成果を上げた。

この運動は都市に波及し、生産性向上運動と結びついて、産業の発展に貢献した。まさに韓国の発展は、彼らの努力の賜であった。

しかしこの大成功を取めた朴大統領の政策は、元々日本植民地時代の宇垣一成朝鮮総督が進めた「農村振興運動」から引き続いたようなものであった。この農村振興運動の指導理念こそ、まさに山崎延吉の「奉公の精神、協同の精神、自助の精神」であった。宇垣の政策は、彼の時代（一九三〇年代）には十分な成果を上げるまで



朴正熙大統領

には行かなかつたが、当時養成した青年指導者は、朴大統領の時代にはまさに働き盛りとなり、セマウル運動の成功に活躍したと確信する。

朴正熙は、語録や揮毫に「自力更生」「農村振興」「維新」などの言葉をよく書いた。特に「更正」という言葉は、韓国では「病人や犯罪者などの蘇生」や「社会復帰のとき」

にしか使われないのだが、それを敢えて好んで使ったのは、日本語のイメージからきたものと思われる。

北朝鮮の脅威からの安定を掲げてクーデターを起こした朴正熙大統領は、一九六二年一月経済開発五か年計画に着手し、国民に豊かな国への夢をもたらし、国民にはいつも北朝鮮の脅威を利用して戦争の不安感を保たせながら、国民統合を訴えて経済発展を図った。このような政府主導の近代化によって、韓国の経済は発展した。その政府主導の政策として代表的なものがセマウル運動である。

このころ『八道江山』というプロパンガンダ映画が、全国的に放映された。ソウルに住んでいる老夫婦が、全国各地に住んでいる子供たちの招待を受け、遊覧するという内容である。戦争の悲劇を乗り越えて、行く所ごとに眩しく発展した韓国の発展した姿と、名所旧跡などの観光地を紹介している。人気歌手の『木浦の涙』などの名曲を聴かせてくれる。

都市へ上京した人が名節の日には里帰りをする。伝統的年中行事が重要な役目になった。セマウル運動は経済的貧富の激差を解消し、利潤志向の機械的な人間に

人間性を吹き込み、伝統的的人生観への革新をするなど、精神的革命でもあったのだ。

### 戦争は正しいか、不正か

私は朝鮮戦争の体験に基づいて戦争の悲惨さをもって小論を書いたことがあるが、それは戦争を否定することによって平和を求める非常にナイーブな反戦的図式に沿ったものであった。しかしそれは世間的に「戦争反対」と平和運動のように訴えたものではなかった。しかも最近私は戦争を否定的に見ていながら、時には戦争を賛美する気持ちが湧いてくることも否めない。

戦争に関する論争のタブーがある。戦争は戦争論から逃げることなく、強靱な倫理を政治家と市民に論ずることが求められている。つまり今まで戦争とは「正しいか」と論ずる対象にはならなかったが、善悪両面から、あるいは多面的に検討すべ

きものである。戦争は一般的に人類社会にもつとも普遍的な「絶対悪」とされてきたと思われていたが、戦争が正しいか不正かを積極的に考えてもよい。

ノアム・チャムスキーが戦争と平和の問題を軍事戦略家や政治家だけに任せることは危険だと警告した。彼は外国へ軍事介入をすることについて道徳的モラルのジレンマに触れながら、戦争へは反戦的な立場をとって、戦争の正義については積極的に言及していない。

トフラーとハイディは戦争と反戦の両面から考察している。彼らは生活のために、家族のために、さらに疾病などと人間は戦わなければならないと「戦い」を普遍的なことと考え、戦争と反戦の二項対立的な調和を見出した。

将来戦争は両超大国の間の全面核戦争の危険は減少するが、国家や民族間の戦争は、小規模でありながら、熱戦になり増えるだろうと予言した。つまり経済的に民族間の競争、政治上のデマ、狂信、民族国家の主権の侵害などで様々な武力紛争が起きるだろう。それらに対して私たちが新しいアプローチとして戦争や反戦平和を考える必要があるという。人を殺さずに敵軍だけを無能にするか、ロボットや、無

人戦闘機、全知なる監視衛星、音のシステムなどのハイテク兵器による知的戦略が支配的になるだろう。

また「反戦」の努力、つまり武器の拡散を止めるための情報技術の共有とニュース発信する平和に関する予防戦略に触れている。

戦争の正と不正の判断基準のモラルは何であろうか。

大前提として、「殺戮や残虐行為から命と人権を守ること」が最大の基準であろう。しかし、命をささげる、死を覚悟しての集団の間での戦いであることは矛盾している。実際戦争によって多くの人が犠牲になったことを考えなければならない。

トフラーが言うように、未来の戦争において、人を殺さず武器や施設だけを壊すことが可能であろうか。戦争が平和や人権を守ることを目指して行うとしても、実際は命賭けであり死の危険にさらされた兵士たちが、倫理によってそれを守る平和の天使のようになれるのだろうか。

つまり戦争の組織は上位が平和、下位が戦争である。つまり『戦争と平和』とは、

小説の題名ではなく、実に戦争のメカニズムとも言える。

侵略戦争や占領、植民地など悪いものに比べて、人権的な立場で他国の戦争に介入することはそれほど悪くないかもしれないが、戦争自体を「正しい」と容認すれば、普遍的な倫理は破壊されると思う。国際社会で審判（国際警察、裁判）の下でルールを守って戦争ゲーム（？）をするというのは幻想であろう。一般的に「正しい戦争」がありうるという論法自体はそのまま受け入れ難い。戦争はもちろん、盗みや暴力などに関する倫理さえも然りである。ただ、昔は貧乏な人が金持ちの家の物を盗むことは許された。家族や親族の中での盗みであれば、法律的に問わないのが一般的である。韓国の教科書では、中国に行った人が綿の種を盗んできたことが英雄として記述されている。ギリシャ神話でも火を盗んできたという話がある。

戦争と盗みも肯定的な面がないわけではない。例えば、火事によって新しい都市が生まれるような副次的なことであるかもしれないが、果たして泥棒も正当化されることが可能であろうか。

戦争は人権と人道を侵した国家に対する刑罰のような、死刑制のようなものだと

いう理論的な根拠になっているだろう。しかし死刑さえ廃止するようになる時代に、大量の命を賭ける戦争を認めるわけにはいかない。戦争の正義として「人を殺すな」とか、ルールを守ったら正しい戦争になるのだろうか。

戦争はしてはいけないと言っても、国家には軍隊は常に必要である。それは戦争がないわけではないという前提に立っているからである。共同体は戦争から守るために軍隊を持っている。それはただの抑止力だけではない。暴力にも正当防衛があるように、防衛戦が必要である。軍隊は生命保険のような性質もある。最低の防衛戦といっても、場合によっては先制攻撃が必要なこともある。

オバマ米大統領は二〇一一年三月二十六日のリビアへの軍事介入について、「人道上の大惨事が回避され、数え切れない一般市民の命が救われた」と語り、「軍事作戦はうまくいっている」として米国民に理解を求めた。このリビア空爆に対して、国会で正当性が問われた。

そもそも「戦争の正当性」とは何だろう。私はこのような宣戦演説を聞きながら、戦争の正当性に不信感が出ることを抑えきれない。

日清戦争の時に明治政府が出した八百字強の宣戦文である『清国ニ対スル宣戦ノ詔勅』には、「東洋の平和のために」など「平和」という言葉が六回入っている。戦争を正当化するためには「平和」が借用されるのが常である。これがアメリカ主導の戦争では「人道」に替っているだけであろう。

マイケル・ウォルツァー (Michael Walzer) は『正しい戦争と不正な戦争』『戦争を論ずる―正義のモラル・リアリティ』(駒村圭吾・鈴木正彦・松元雅和訳、風行社、二〇〇八)といった戦争の正義と不正義についての力作を続けて発表している。

第二次世界大戦中に育ったウォルツァーは、「正しい戦争」と「そうでない戦争」とを、論理的に弁別し、侵略行為や残虐的な行為、つまりナチスやルワンダでの殺戮行為などに対する軍事介入を人道的だと主張する。具体的には以下のような論旨になる。

「戦争とは手段を異にした政治の延長」

「政治は手段を異にした戦争の延長」

「戦争は時として正義にかなうという主張と、戦争行為は常に道徳的批判にさらされなければならないという主張の二面からなっている」

「恋と戦争は手段を選ばない」

「一体、どうして戦争が正しいものになり得るのだろうか？ 戦争はこんなにも恐ろしいものなのに」

この世には、平和主義者を装った破壊、侵略、戦争を行う者が多い。そしてどの侵略者も口にする言葉は「平和か、人道か」である。ウォルツァーはこの点に注目して問題を絞っている。平和を守るために戦争を起こし、その多くは「国益」のためであるという。つまり従来の戦争の評価の標準的枠は、正義ではなく利益であったと批判する。特に宗教学者や神学者たちの道徳論的な戦争論を信頼せず、本当の道徳的な観点から戦争を検討すべきとしている。彼の道徳というのは「人権」である。

人権や人道から戦争を見ると、ベトナム戦争、南アフリカのボーア戦争など残虐行為、非戦闘員、民間人の殺戮行為のあった戦争は「正しい戦争」ではないという。「正義に疑いのある戦争はしてはならない」という教訓があり、戦争とは軍人による戦

争を言い、戦闘とは戦闘員間で行われるべきものであるという。無防備の民間人の殺戮は殺人であり、民間人を殺戮するいかなる戦争も不正義であり、すべての戦争は結局不正義なものとなる。しかしアフガニスタンの戦争は必要なものだという。

戦争中のことだけではなく、戦争の終結にも正しい戦争にならない。戦前の原状回復を実現して終結しなければならない。特に人道的介入の戦争であれば、終結をきちんとすべきである。成功したものは次も、またその次も成功させなければならぬ。それが成功の代償なのだろう。占領の正当性、体制転換、および保護領に関する説明も含まなければならぬだろう。

無辜な一般市民を殺害すること、恐怖によって人々を萎縮させるテロの暴力は、「無辜な (innocent) 人間は決して意図的に攻撃されてはならない」、つまり無辜であることは不可侵であるといい、戦争論理を犯すことになるからであるという。しかし私は、兵士は生命が絶えず危険にさらされているから、無辜な人々を殺すことがありうると思う。兵士たちは警察、消防、船員などと同様に、共同体の無辜な人たちの生命を守るために生命にリスクを負うことが要求されている。またそれは

抵抗対象である悪と自分が実際に行う悪とを同時に認識し、そしてできる限り、その双方の悪に反対の立場でいるということである。彼の理論によれば、無辜な人々を殺すテロの対策としては、勝利と支配ということでは解決ができない。人間性を根こそぎにする苛酷な暴力に対しては、軍事力の行使ができない。

彼の言う「正しい戦争」とはどういうことであろうか。根本的な疑問である。人類の悲劇を防がねばならない、戦争は最終的な暴力として認めざるを得ないという「必要悪」として戦争を行うと言う。侵略、軍事介入、正しい大義、自衛、非戦闘員保護、捕虜、二重効果、テロリズム、戦争犯罪などの言葉を私なりに言い換える、と、「人権」を守るためには戦争は正当化されると解釈される。その人権の方から戦争を見ると、ウォルツァーが言うように、ベトナム戦争、南アフリカのボーア戦争など、残虐行為、非戦闘員、民間人の殺戮行為のあった戦争は正しい戦争ではないと言ふ。

軍隊による強姦や売春は常にある現象とはいっても一様なものではない。軍隊の



下関の日中戦争参戦者、故小山上等兵が撮った「慰安室」

ではなく、その前の年代から連続するものである。つまりそれは南北の敵対関係、反共思想、軍事政権に連続するものである。一方北朝鮮も、戦争復旧の過程においてパルチザンと建国の歴史を統合させた「革命伝統」をもって国民的統合性の求心力にし、それが金日成の個人絶対化に結びつくことになった。このように、敵対関係をもって国民統合政策をとることは、南北において共通するものである。

強姦や売春はその国家の軍隊の政策と被害国側の態度などによってその様子が異なることがわかる。米軍は朝鮮戦争で恩恵深い友好軍であり、その駐屯は朝鮮半島の安全保障の象徴的な存在である。日本に駐屯している米軍より韓国に駐屯する米軍の周りに売春が盛況している。それはアメリカとの外交によって異なり、特徴づけられるという。

朝鮮戦争は否定的にも肯定的にも韓国社会に大きな影響を与えた。南北の敵対意識を高めることにより民族の統一を遠ざけたが、反共思想を通して国民を統合することができた。しかしそれは軍事クーデターを導き、長い間軍事独裁政権が続く結果になった。キリスト教などの宗教団体は反共産主義的になり、特にキリスト教が普及し、伝統的な儒教の価値観に変化をもたらすようになった。それは近代的な意識構造を伴い、近代化への基礎にもなったのである。

一九五〇年代の韓国社会は解放後の混乱が続く中で朝鮮戦争が起こり、社会が回復するまでは時間がかかった。そこに軍事独裁政権が現れ政治安定を目指し、急速な近代化政策を進めた。しかしそれは一九六〇年代以後だけの現象として起きたの

韓国社会は激しく変化しながらも、なお儒教的性倫理、貞操観が強く保たれている。それは現在の韓国の政治状況に大きな影響を与えており、具体的には戦後の韓国政府の政治的セックス政策がそれにあたる。否、影響を受けているというよりもむしろ、韓国政府は常にセックスや性倫理を政治に利用しており、今問題になっている慰安婦問題もそのような類に過ぎない。

本書で大きく取り扱っている米軍の慰安婦やいわゆる日本軍慰安婦の話題は、歴史的に遡ることができる。それは今突然現れたとか、日韓関係によって生じたものではなく、韓国の伝統的なものに過ぎないと思える。

本書は、このように性と政治が深く関わっている韓国社会を理解するために、書き下ろしたものである。

戦争において、兵士は交戦の恐怖を紛らわすため、逆に生き残ったという嬉しさと、解放感からセックスを求める。その例を本書では繰り返し言及した。私の故郷の村では、村人が国連軍の性暴行の犠牲になり、村人たちを守るために、売春婦を受け入れた。その結果、伝統的な儒教の貞操観を持っていた村が、一瞬にして慰安婦、売春婦の村になったことを私は体験したのである。

韓国には貞操に関する法、姦通罪などの刑法がある。本来、儒教的なモラルから考えると売春婦を村に置くことは許されなはずである。しかし、貞操を守るために売春を認めるという矛盾が起きた。いや矛盾と言うより、非倫理的だと言われる売春が、他方では倫理性も持つという二面性があることがわかったのだ。結果的に売春が親孝行や家族への献身ということになり、村では肯定的に評価された。

我が村の例をもって、国家の経済的、外交的な政策をふり返ってみよう。韓国では一般的に、売春婦のような女性は自ら貞操を守れなかったことを恥と思ひ、隠すのが上策であった。貞操を守れなかった女性は差別され、政治的な場面に浮び上がることはほとんどなかった。しかしその一方で、彼女たちを外敵から貞操を守った

という脈絡から愛国的行為だと褒めたり、命の代わりの貞操を国に捧げる愛国者だ  
という表現もなされたりした。

高麗と李氏朝鮮では、処女性<sup>Ⅱ</sup>貞操を守る女性を「烈女」として理想の女性像に  
してきたことを明らかにした。韓国の地方を歩くと、「烈女閣」や「烈女碑」を見  
かけることがある。倭寇（日本）や蒙古（モンゴル）に処女を奪われた恥辱を強調  
しながら、民族のアイデンティティーを求めた。特に豊臣秀吉の朝鮮侵略の時、妓  
生の論介が倭将を抱き締めて落ちて死んだという伝説の義岩の絶壁で、女性観光客  
が伝統衣装を着てみるのは観光地の名物となっている。また、広い公園には愛国忠  
誠の施設が立ち並んでいるが、新しく作られたものほど古い時代を扱った施設が増  
えている。私はここに、不自然な伝統文化の創出、捏造を感じた。

とある博物館では、豊臣秀吉の侵略と韓国の愛国について日本語で案内された。  
上述の「論介伝説」は、いまだに教育、宣伝されている。私は慰安婦問題もその連続、  
延長線で考えてよいだろうと思っている。このように韓国が性<sup>Ⅱ</sup>セックスをもつて  
ナショナルアイデンティティーを創ることに、重大な矛盾点を露出している

ことを私は看過できない。

交戦というのは、人と人とが殺し合う極限状態である。そこに倫理など存在しな  
いことを私は目撃した。そこには狂気をはらんだ軍人がいた。軍人だけではなく、  
一般人もそうであった。戦争が正気か狂気かという論議がある。戦争という定義や  
範囲は広く、戦争を総合的に狂気だとは言えないが、少なくとも人と人が殺し合  
う最前線、局部戦においては、お互いが命を守るために必死であり、とても正気と  
は言えない状況であった。

交戦直後に性暴行が起きた。もちろん一部の軍人ではあったが、戦争を理解する  
ために、倫理のみでは是非を判断しないよう注意すべきである。

戦争では勇士も現れるが、その一方で犠牲者も出る。そこから英雄や愛国者が生  
まれる。韓国の場合は、女性犠牲者が「烈女」とされるケースも多い。日本軍に貞  
操を奪われることを最大の侮辱と考え、その怒りが慰安婦を愛国者へと昇華させる。  
最近の日韓関係において、慰安婦が愛国者として英雄視されるまでになったのも、そ

の脈絡から理解できるだろう。それは韓国政府や指導者が、国民が貞操を強く意識しているということを知って成し遂げる政策と言える。

米軍相手の売春婦も同様な脈絡で理解できる。彼女らは「洋カルボ」、「洋公主」(西洋の王女)と呼ばれる。この二語は侮蔑語であるが、前者が「売春婦」であるのに対し、後者は「お姫様」という意味を持つ。このように実際否定と肯定の二つの側面を持っている。そして、場合によって蔑視されたり、英雄化されたりするのである。

戦争を通して売春婦が多く創出されるのは、こういった理由である。性は結婚、家族、社会の存在の基礎でありながら、倫理的に逸脱すると売春になりうる。このように性は、明と暗、表と裏のそれぞれ社会的、文化的要素を持っている。その要素は、社会が極度に混乱したり戦争になったりすると、ダイナミックに作動する。我が村の人たちが売春婦を迎え入れ、積極的に収入源にしたのはそういう意味である。このように、売春は性の逸脱とされる一方で、外貨を獲得する偉大な行為として黙認された。

現在も韓国では売春婦が半公娼的に認定され、朝鮮戦争後半世紀が過ぎても、売

春は駐屯基地を中心に広がって存続している。戦争と平和は綺麗に二分されていない。この両面は社会の明暗であるからであろう。韓国の基地村売春を専業とする人口は、現在数十万人にもなるという。

このような性の逸脱現象について、看過してはいけない重要な点がある。それは、売春婦自身にとって売春が国際結婚への道を探すという目的の一つだという事実である。貞操を尊重する韓国社会において、それを失うことは墮落者であると思われる。売春婦を含む貞操を失った人たちは結婚が難しくなり、結果として売春を通して国際結婚の相手を見つけなければならないのは皮肉なことかもしれない。また、基地村売春婦だけではなく、茶房(喫茶店)における売春でも同様の現象があることを本書で明らかにした。マクコの視点では無視されがちなことではあるが、ミクコの視点で社会の底辺にも目を向けなければならないと思う。

ヒョンスク・キム(Hyun Sook Kim)は、韓国の小説を分析して、強姦、離婚、売春の体験を持つ女性アメリカへ行くのが唯一の希望であるという。

アンドリュー・P・キリック (Andrew P. Killick) は、韓国の女性と付き合った体験に基づいて、売春婦などの「性的キャリアウーマン」にとっては、アメリカ人男性が結婚相手として羨望的になるという。逆に西洋人男性の方は、韓国のそのような女性と付き合うことは落とし穴に落ちることになるのではないかと心配するという。

呉善花は、貞操を失った韓国の女性が、売春か恋愛か曖昧な交際で結婚を求める現象を明らかにした。このような女性のほとんどが、日本やアメリカなどの外国人と結婚をする傾向があり、性的に海外へ流れる傾向があるのも事実である。

ヒョンア・ヤン (Hyunah Yang) は、いわゆる売春婦たちの告白と韓国人の民族主義者たちの言説が違うことを問題にする。つまり、通常の政治的状况においては貞操を失くした女性が軽蔑されるが、国家が特に外国を攻撃する時には、愛国者だとか、あるいは犠牲者として「貧しい家庭の娘、我が国の娘 (the daughter of poor family, our nation's daughter)」〔獣のような米兵の犠牲となった〕善良なる女性」という言い方もされるのである。また、親孝行や家族への献身などによって、

売春は肯定的に評価されることも上述の通りである。

チョリン・ユ (Chul-In Yoo) は、スンヒという女性が、兄弟の学費のために売春し、そしてアメリカ人と結婚したライフヒストリーを紹介して、彼女が自己を正当化する過程を明らかにしている。

戦争中には強姦などの性暴行が起きたことは知られているが、平和のために戦争をする論理とは極端に矛盾する。もし戦争が平和のためにやるものならば、最前線に立つ将兵たちは天使のような存在でなければならぬ。しかし戦争中にその兵士たちが、敵国や国内において多くの殺人や強姦事件を起こしたことは、どう理解すればいいのだろうか。戦争の意味をもう一度深く考えなければならぬ。私に残ったもう一つの大きい問題である。